ニシテ不治ナレドモ、已ムコト無ンバ羚角飲ヲ與フベシ、

〔漫遊雜記下〕有一男兒十二歲、左右足痿如無骨者、語言蹇澀、目脈赤、無故悲愁、經數醫不治、請余○永富鳳卿診其脈滑數、腹位逼胸脇、臍下如空、審問其平生、氣稟猛烈、過群兒、方其怒罵之時、眼光爛爛、血氣如湧、蓋氣疾之一種、而全與偏枯相類、唯老嫩異而已、與參連湯、兼用熊膽貳分、十四日病稍輕、續服參連湯、六十餘日而全愈、

〔本朝世紀〕久安六年十一月九日辛巳、五條末川原邊棄奇兒、其面如人、無鼻及兩眼、當額有一眼、有兩瞳子、女人形也、有陰穴云々、

額上有眼

〔日本書紀六垂仁〕二年（中略）一云、御間城天皇（崇神）世、額有角人、乘一船、泊于越國筍飯浦、故號其處曰角鹿也、問之曰、何國人也、對曰、意富加羅國王之子、名都努我何羅斯等、亦名曰于斯岐阿利叱智于岐、

額上生角

〔日本紀略一醍醐〕寬平九年七月廿二日乙未、陸奥國言、安積郡所產小兒額生一角、角亦有一目、

〔三養雜記三〕人角

文化庚午の藥品會に人角いでたり、そは薩摩なる伊作地士、黑川某の額に、一角を生じたり、年八十七歲、元祿三年庚午夏五月十四日終と云るしありしを、人みなめづらしきことにいひあへり、案ずるに人角は和漢ともに往々所見あり、そのためしなきにあらず、日本紀略、寬平九年七月廿三日、陸奥國言、安積郡所產小兒額生一角、また新著聞集に、額に角二本ありし子を產たることあり、又北窻瑣談に、寬政四年辛亥、備後國蘆田郡常村の農夫、八十餘歲にて額に一角を生じ、翌年正月十七日解脫と見え、簷曝雜記に、梁武帝時、鐘離人顧思遠、年一百十二歲、蕭俱見其頭有肉角長寸許、見俱傳余亦曾見二人、一江蘭皐陽湖人、一徐姓嘉興人、頭上皆有肉角、高寸許、年亦皆九十餘、蓋壽相也、然、二人皆貧苦無子、則亦非吉徵といへり、かゝれば人角は小兒と老人とにあることゝ見えたり、再按に、日本書紀垂仁紀に、額有角人乘一船泊于越國筍飯浦、などあるは、正しく角ともさだめ